

## 書評

大石和欣著

『家のイングリッド』

変貌する社会と建築物の詩学』

(名古屋大学出版会、二〇一九年)

金澤 周作

一読して、歴史学のデイシプリンシカ知らない人間には書けない文章、描けない図柄だと感嘆した。著者大石は、専門の英文学の諸作品に通暁しているだけでなく、長く実り豊かなオックスフォードでの留学生活を通してイギリスの人や文物を体感して血肉化し、さらに歴史学の方法も熟知しているという稀有な研究者である。『家のイングリッド』は、この三つの特長がみごとに発揮された作品だ。読者の前提知識や関心に応じて、打てば響く読後感を与えてくれる書物ではないかと思う。本評では、英文学に詳しくもなければイギリス滞在経験も長くない、近代イギリス史を研究してきた一読者なりの収穫の中身を共有してみた。以下、前半で各章の内容をまとめつつ多少のコメント

を付し、後半で全体に関わる批評を試みる。

本書の目的と構成は、大略、次のようになっていいる。英文学作品において「家」(または建築物)が喚起するイメージのバラエティと変遷を、同時代の現実の文脈を踏まえながら時代順に論じていくのである。すなわち、一・一九世紀後半の都市の深奥に巢食ったスラム(第一章、第二章)、二・前世紀転換期に都市から触手のように伸びた郊外住宅(第三章)、三・戦間期から第二次大戦後にかけて都市と対置された田舎の農家屋およびカントリー・ハウス(第四章、第五章)、そして、四・二〇世紀後半に再評価されるヴィクトリア時代の建築物(第六章)。

「序章 イングリッシュな家の「ヒトウス」で研究史的な意味は示されているが、本書では、主として中流階級からなる歴代の文学者たちによって想像された貧困者、下層中流階級、中流階級、上流階級が、その独特の住環境——地霊が住まい、時間の層が折り重なった「記憶の場」でもある建築物——を創出し、かつその住環境によって独特の「歴史的な生態的特性」を刻み込まれる仕方に焦点があわせられている。つまり、本書の主体は住人というより「ヒトウスとしての家」である。やや言葉を補えば、「ヒトウス生成の場(クロノトポス)」としての建築物」ということになるうか。様式変遷史としての建築史とは異なる視角が

明瞭に打ち出され、血の通った、濃密な、ときに息の詰まるような、いくつかの時空間が描写されていく。

「第一章 闇の奥の家——スラムをめぐるまなざしと表象」では、エドウィン・チャドウィック、ヘンリー・メイヒュー、フリードリヒ・エンゲルスらによる先駆的なルポルタージュ的なスラム表象、ディケンズやギヤスケルの文学的な下層社会像、オクタヴィア・ヒルやウィリアム・ブラスの「暗黒」へのチャリティ的なまなざし、R・L・ステイヴンソンやブラム・ストーカーの不安と緊張に満ちた裏と表の世界の近接性への気づき、各種のスラム探訪やアーサー・モリソンによるデイストピア的位置づけが畳みかけるように解説される。

筋違いの感想だが、国際法の博士号を持っているイギリスのSF作家チャイナ・ミエヴィルが『クラーケン』（二〇一〇年）で創造した、魑魅魍魎が跋扈し、堅気の人には見えない通りや小路が潜む、生き物のようなロンドンを想起させられた。本章が取り上げた都市描写のパターンは、それくらい長い命脈を保つ文学的テンプレートだということなのかもしれない。また、中流階級が、自分たちの生きる世界のすぐ裏側に「染み」のごとく存在したスラムを、異質で危険で、のぞき見趣味的な喜びを与えてくれる他者として構築することで、はじめて中流階級的な理想の

家——「イングリッシュな家」——が対比的に自覚される（大石の表現では「逆説的に再構築」される）という論旨は説得的である。ただ、社会調査もチャリティによる援助もすべてブラックホールのごとく飲み込んでしまうスラムとスラム住民の「ハビトウス」は、徹頭徹尾、書き手である中流階級のモノローグの産物である。スラム住民によるカウンタート・ナラティブは皆無たとは思われないのだが（次章参照）。

「第二章 スラムに聳えるネオ・ゴシック建築——夢に終わった中世の理想」では、スラムの深奥にも建築されたネオ・ゴシック様式の建築物の意味を問う。背景となるコンテクストは、「中世主義」のブームである。これは理想の過去としての「中世」の「再創造」の運動であり、それにより、人間が疎外される悲惨な近代の「超克」を果たそうとした。中世主義は、都市部での教会や駅舎、大学などの建築物の形だけでなく、遠くコベットやワーズワースらのロマン主義に淵源する、農村での田園主義（一九世紀末〜二〇世紀初）にもあらわれた、全方位的な潮流である。いずれも、急速な近代化のひずみ、端的にはスラムが象徴する自由放任主義や功利主義の酷薄を是正する真摯な渴望のあらわれである。

大石はここでも、ブルドーザーの如き力業で関係する諸

作品を総なめしていく。すでに一八三〇—四〇年代に、ピュージンの『対比』やカーライルの『過去と現在』が登場し、テイラーが寿ぐピクチャレスクな工場群という近代礼賛イメージを批判していた。世紀半ば以降についてはラスキンによりゴシック建築にさまざまなポジティブな価値が読み込まれる。不平等社会を否定しないラスキンによって持ち上げられる、自然の不完全さを模した過剰装飾のエネルギーに満ちたゴシック建築は、スラムに聳えるとき、「雅量」の美德——ベネヴォレンス、チャリティのラスキンの表現——を体現することになる。ウィリアム・モリスの『ユートピアだより』に至ると「スラムなき世界」が創造される。世紀末にはアーサー・モリソンの『ジェイゴの少年』など、スラムを舞台にした実録風の小説が次々に人気を博した——。

この章でも、スラムは中流階級のアイデンティティのネガとして定位され、ネオ・ゴシック建築は彼らのモノローグである。スラム住民との融和は果たされない。その矛盾と限界を大石は強調する。ただ、そうだとしても、前章について触れた「カウンター・ナラティブ」は、もしかするとスラム住民の側からの、ネオ・ゴシック建築やそれが表象する中世主義的な有機的階層秩序の、ユニークな領有(融和)を示したりもするのではないか。たとえば、『ジェイゴ

の少年』を地で行く、アーサー・ハーディングの回想記録『ラファエル・サミュエルが編纂して一九八一年に出版』——大石が本章末尾の行論で参照しているサラ・ワイズのすぐれた著作(評者は和訳で読んだ)でも重視されている——からは、アーサー少年のそのような建築体験が読み取れるように評者は感じている。

「第三章 「混濁」した郊外と家——不可解な空間」は、ユートピアでありかつカオスでもあった世紀転換期の郊外に舞台が移される。都市の不健康な環境から大挙して脱出してきた下層中流階級の人々は、「二戸建て、二軒一棟建ての住宅、あるいは棟割長屋様式のテラスハウスの住宅」といった「マイホーム」を持つことをステイタス・シンボルととらえ、これが林立する風景を「ピクチャレスク」だと評価するようになる。こうしたポジティブなイメージとは裏腹に、ロンドン郊外を舞台にした小説作品群——ギッティング、W・ペット・リッチ、E・M・フォスター、A・ベネットら——の読解を通して、大石は、当事者にとって実存的な空間であるはずの郊外と郊外住宅は、実は「みじめ」で、画的で、女性を束縛し、階級間および階級内の隠微な差異を内包し、人が常在せず流転し、親しみのある社交も存在しない、生きた歴史の蓄積もアイデンティティも「地霊」も欠いた「没場所性」として表象されている

ることを暴いていく。ロンドン郊外で転居を繰り返した夏目漱石が、郊外住宅を「地獄」と表現しているのも面白いし、コミュニティの不在が隣人の異様なプライベート空間への強い関心と呼び覚ましたことを、コナン・ドイルの『四つの署名』に拠って論じている点も興味深い。

モダニズムの到来により「家」ばかり扱うとして低い評価に甘んじてきた郊外文学を正面からとらえなおし、「家」こそが下層中流階級の人々の抱える不安の形象であったことを明らかにする本章は、作品読解のスリリングさのみならず、歴史学の研究からではあまり見えなかった、世紀転換期のある歴史的風景を描いている点で、ひじょうに高い価値があると感じた。

「第四章 イングリッシュな農家屋——遺産の継承と社会」は、文学作品の中でも構築された伝統的な「イングリッシュな」農家屋が、文化継承や再生をテーマにしながら、内部に時代の「社会の病理を隠匿」しているさまを論じる。二〇世紀初頭は、建築物が次々に建て替えられる時代であったという。それゆえに空間は混沌となり、アイデンティティは断絶した。農業の衰退も進んでいたため、前章で取り上げられていた郊外住宅とは差異化されるレッチワースのような、都市と田園の折衷、田園都市が開発された。こうした帰農主義、あるいは田園の理想化を体現して

いたのが、世代を超えてたたずむ農家屋であり、『クラリオン』や『カントリー・ライフ』誌を通じて、人々の憧憬の的となる。そうした「イングリッシュな」農家屋が重要な役割を演じるのが、フォースターの『ハワーズ・エンド』である。大石はこの作品に、ラスキンの系譜や、ナシヨナル・トラストの足跡を読み解くだけでなく、地霊が息づき変わらず土地に根を張っているように見えるハワーズ・エンド邸の継承というモチーフに、ハビトゥス形成とならび、ひそやかな断絶の契機——階級的、血統的、イデオロギー的——を見出していく。評者の突飛な連想かもしれないが、第二次大戦中に執筆されたというトルキン『指輪物語』のホビット村の農家屋にも、同じ診断ができそうだ。

結局、田舎の農家屋は、第一章から第三章にかけて扱われていたスラムと郊外住宅の対極物として構築され、中流階級の理想やノスタルジアが投影された。しかし同時に、農家屋は理解したい時代の変化への不安が醸成される場でもあった。理想は幻影に終わるのである。この章を読んでも、ロマン主義から中世主義を経て田園主義につながる太い動脈を流れているのは、一貫して、中流階級が抱いていた失われたものへの憧憬と失われたものの構築に向けた意志の力強さ、そして、表面上の熱心な構築物へのコミットメントの裏でちくちくと刺してくる幻滅の苦さだったので

はないかと了解することができた。

「第五章 「空っぽの貝殻」——消えゆくカントリー・ハウスの幻影」は、一九〇〇年から七〇年に約一五〇〇軒のカントリー・ハウスがイングランドから消えたという衝撃的な数字から説き起こし、現在カントリー・ハウスが醸し出す「偉大な遺産」というイメージとそぐわない、この時期の大破壊の意味を論じる。両大戦の衝撃や大土地所領の苦境、炭鉱での厳しいストライキ、帝国の退潮に伴う旧支配層のアナクロ化と影響力の低下といった現象を丹念に背景として据えながら、取り上げるのは戦間期から第二次大戦後にかけての作品群である。『ダロウェイ夫人』ではカントリー・ハウスは過去の亡霊であり、存在が希薄化している。『チャタレイ夫人』では、血統の継承に失敗した男爵もその屋敷も「空っぽの貝殻」とされる。『レベッカ』では、前妻の記憶の満ちるマンダレー館は主人公に「ゴシック」的な「違和感」、非現実感を喚起し、恐怖のトポスとなり、「空っぽの貝殻」であり、最終的には焼失する。『プライズヘッド再訪』では、中流階級の主人公が若かりし頃に訪れた記憶の中のカントリー・ハウスに、当時の彼には理解できない地霊がおり、しかもこの館そのものが今や「空虚」なのである。『日の名残り』で描かれるカントリー・ハウスも時代に取り残された遺物として、かつての威厳は

「空洞」化している。

カントリー・ハウスは無理に延命しようとする過去の記念碑であり、それ自体は「空洞」なのだが、人々は過去の幻影にすがる。最後に、ヴァージニア・ウルフと深い愛情関係をとり結んだヴィタ・サックヴィル・ウエストという女性が、シッシングハウス・カースルの維持管理に心血を注ぐエピソードが置かれている。一見、この現実だけは、上記の小説群とは異なり、不思議と明るい、前向きなカントリー・ハウスのイメージを喚起する。しかし、館の存続は、その将来的な「死」が避けようもない中、必死に延命に奔走する人間の「戦い」の姿でもあるのだ。

本章では観光化という現象にも紙幅が割かれている。観光客は、威容を保つカントリー・ハウスが実は死病に蝕まれていること、皮肉なことにデリカシーのない観光客の存在によって延命していることを、知っていた(る)のかどうか。この観光客が、本章で挙げられた作品の読者でもあるとき、大石が擲り上げた滅びへの慄きを感じ取れた(る)のか。

最後の「第六章 建築物の詩字——ジョン・ベッチャマントと歴史的建築物」は、ここまでの行論を受け止め、また最初の一九世紀ヴィクトリア時代の建築物のテーマへと回帰する、絶妙な章である。二〇世紀の前半から後半にかけ

て、「国民詩人」ベッチャマンの経歴をたどり、彼が建築物を生命体（「詩」）としてとらえ、その実用性に重きを置き、モダニズムや古典様式の秩序性ではなく、ヴィクトリア時代のネオ・ゴシック様式の混濁ないし複合混成感（コングロマリット）を評価し、資本の力で強行される再開発に反対し、歴史の層が積み重なった教会や街並みを愛したことが共感的に述べられる。彼は古い建築物とともに地霊を掃掃することに抗っているようにみえる。彼は自動車や鉄道での旅を好み、各地の古い建築物を賞玩し、かつての郊外住宅で、一九六〇年頃には「貧困パーク」と揶揄されていたベッドフォード・パークの保存運動のように、先頭に立って建築物保存活動を行う。

評者の不明を恥じるが、この章を読んでではじめて、ネット上に数多くアップロードされているベッチャマンのテレビ番組の存在を知った。本章では書かれた詩文の分析に重きが置かれていたが、映像メディアも一種の *Literature* と捉えて、これらを「読解」することも、もしかして可能なのではないかと思わされた。いくつか視聴してみると、ベッチャマンの語り口はむしろん、BGMもカメラワークも魅力的である。

以上で本書の内容を概観してきた。各論としても全体としても、軸は一貫しつつ陰影に富む叙述がなされている。

とが分かると思う。ここからは、本書評——といっても主眼である文学研究としての価値を云々する力はないのだが——を締めくくりにあたって、いくつかのコメントを記しておきたい。

先鋭的な英文学者なら、テクストの外部のリアリティについては括弧に入れて棚上げする、あるいはリアリティ「表象」として、文学作品のそれと同次元で扱うこともあるだろう。しかし、大石は（歴史学研究者にはありがたいことに）実在論の立場をとっている。客観的な経済条件や社会政策や帝国政治や戦争は、作品をよりよく理解するための現実の土台として活かされている。だからこそ、本書の読者は、退屈な歴史の概説書では決して得られない、同時代を生きた作家によって鋭敏に感じ取られ、魅力的なアネクドットに変換された時代の特徴の描写——しかも虚構であるからこそ圧縮され輪郭がはっきりしている——に介助されて、最後まで興味を切らさずに読み進み、知らなかった歴史を多く学ぶことができるだろう。

ひるがえって、歴史学が見つけてくる史料の伝える情報が、巷間言われる「事実は小説より奇なり」な内容であることは稀である。史料となるテクストの書かれた目的は実に多様なので、こちらの期待からすると、断片的で、ずれていて、隔靴搔痒である。その点、大石は、背景となる歴

史的事実を歴史家の研究成果から借り、その上に、実に巧みに作品群を配して描写を重ねていく。こうして立ち昇ってくるのは、五感を刺激する図柄である。評者は歴史家のはしくれとして、大石の著書が構築した、諸階級が家をめぐって織り成すモザイクのようなイギリス近現代の時空間に大いに納得させられ魅了されたことを、忸怩たる思いで受け止めている。なみの歴史家にここまで鮮やかな、読者を知的に満足させる『家のイングリッド』が書けるだろうか、と。

一九世紀から二〇世紀半ばにかけて、かつての安定(ひっかかり)を失くしてしまった、違和感のただなかにいる中流イギリス人男女の不安とあがきの表明のような、文学における家モチーフの系譜を描き切った本書は、大石自身の地霊への愛惜の念に貫かれている。都市スラムはいわば非場所であり、地霊などありようもなく、いかに中世主義建築で場所性を回復しようとしてもデイスコミュニケーションは是正されない。劣悪な都市環境(非場所)を脱出して下層中流階級が憧れ手に入れた理想の郊外住宅は地霊のない没場所であることを露呈する。あらまほしい地霊づく田舎の農家屋やカントリー・ハウスも、幻影にすぎない。大石が「想い出の家——あとがきにかえて」で回想する幼少期に暮らした今はなき「田舎の古い農家屋」のイメー

ジは、実は評者にも深く共感するところがある。評者も幼少期から学生時代まで「田舎の古い農家屋」で育った(自宅近くに現存し、そこに両親が暮らしている)ので記憶化することは難しいが)。だから、地霊的なものに惹かれる気持ちはとてもよく理解できる。ただ、それゆえにこそ、こうした愛惜の情を持つことの贅沢さも痛感するのである。本書には家に過剰に思い入れを抱き裏切られる中流階級の悲哀があますところなく描かれるが、人口の過半を成した労働者階級の家とのかかわりは、そのような甘さを持つ余裕があっただろうか。

『家のイングリッド』は十二分に説得的な作品であるが、その美しくも哀しい諦念ただよう輝きの背後に、貧しい人たちが(中流階級によつて表象されるのではなく)自ら生きて構築した別の「家のイングリッド」、別の系統のハビトゥス形成の場としての(「文学的」ではないかもしれない)家の言説ないし歴史の層が控えているようにも思えるのである。この点で、たとえばレイモンド・ブリッグズのグラフィック・ノベル、『エセルとアーネスト』(一九九八年)は、作者の両親である労働者階級の主人公が暮らす戦間期から戦後にかけての家の変遷が視覚的に表現されているので、ぜひとも分析されるべきLiteratureといつてよいと評者は思うが、検討範囲はもっと広げていけるだろう。スラ

大石和欣著『家のイングランド―変貌する社会と建築物の詩学』（金澤）

ム街の貸し間、貧農のコテージ、モデル工業村の労働者住宅、家事使用人にあてがわれる屋根裏部屋、日雇い労働者が暮らす木賃宿、水夫がハンモックで起居する船倉、兵士のバラック、慈善養老院、孤児院、救貧院、刑務所、ホームレスが夜を過ごすシェルターや橋の下、第二次大戦後に急速に増える高層公営住宅、移民街、スクオッターが不法に居座る空き物件など。もし文学に素材が少ないなら、今度には歴史学（そして現在ならば社会学）の出番かもしれない。

本書を読んで、参照される作品を読みたくなるし、登場する建築物や土地を訪問したくなる。大石がチャールズ・ブースの「貧困地図」を片手にロンドンを歩いたように、いつか、『家のイングランド』を片手にイングランドを歩いてみたい。そう思われる素敵な書物である。



註

(1) 本書評をひととおり書き上げた後に、次のような研究書  
の存在を知った。大石も参考文献に挙げていたが、『家の  
イングリッド』を建設的に補完する内容を備えた好著だと  
感じた。Nicola Wilson, *Home in British Working-Class  
Fiction*, Ashgate, 2015. 特に第二章は面白く。

(京都大学大学院文学研究科教授)